СТУПЛЕНИЕ И НАКАЗАНИЕ

РОМАН

Ф. М. ДОСТОЕВСКИЙ

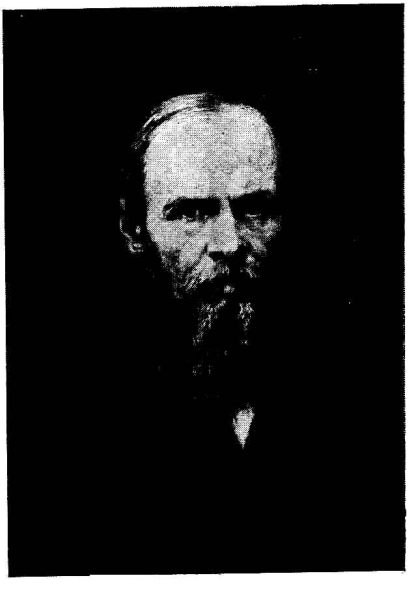
罪と罰

世界文學全集

著イキスフーエトスド

罪と罰

中村白葉譯



新潮社出版

非賣品

世界文學全集(22)
罪と罰
第十五回配本

昭和三年五月十日印刷
昭和三年五月二十日發行

飜譯者 中村白葉
發行者 佐藤義亮

東京市牛込區矢來町
發行所 新潮社
電話牛込 一八八八番 二〇〇〇番 四九八七番 六番
振替東京 二三、四五〇番

東京市小石川區久堅町 共同印刷株式會社印刷

序

一、わたしは、本書『罪と罰』の飜譯に依つて、文筆生活へのスタートを切つた。それは大正三年、わたしの二十五歳の時であつた。爾來十五年、その間にわたしは幾多の飜譯書を公けにしたが、併し何と言つても一番緣故の深いものは本書である。この緣故の深い譯書が、今日十五年振りに全然面目を一新して、新たに又多數の讀者に見える事の出來るのは、わたしとしてどれ程大きな喜びであるか知れない。

一、本書に對しては、これまでもわたしは、版の更る每に、若干づゝの訂正を加へて來たが、別して今度本全集の一册として改版せられるに當つては、徹底的の改譯を試みたから、十五年前の第一版から見れば、確かに面目を一新してゐると斷言して憚らないのである。殊に、わたしは從來、飜譯に對して非常に窮屈な考へを持ち、飽くまで逐語譯を以て終始しようとした爲め、時には日本語として無理な表現に陷つて、衷心讀者に忠實であらうとして却つて、知らず識らず讀過の際の興を殺ぐやうな皮肉な過ちを冒してゐた場合も屢々であつた。が、今回の改譯に際しては、本全集が、單に文學愛好者のみに止まらず、社會の各方面に亙つて多數の讀者を有し、非常に廣い範圍の人々を豫想しなければならぬ性質上、能ふ限り平明達意を旨として筆を進めるだけの用意をした。尤も、それだからと言つて、從來のわたしの根本方針、逐語譯を捨てたわけでは決してないから、その點は必ず誤解のないやうにして頂きたい。尙、わたしのこの用意に對しては、特に本全集の爲めに新潮社內に設けられた調査部が、全國幾十萬の讀者を代表する機關として、常に適切且つ親切な忠言と助力を惜しまれなかつた。玆に附記して同部擔當諸君の勞を多とすると共に、この機會に於いて讀者諸君にも廣くその隱れたる功績を傳へたいと思ふのである。

一、『罪と罰』の邦譯は、わたしのもの以外、二種ばかりあるにはあるが、それは何れも英譯乃至獨譯からの重譯で、

直接原語からの飜譯は、今のところ拙譯を除いては一つもないわけである。今後ともわたしは、機會ある毎に譯筆の不備を是正して、生涯かゝつて「わたしの罪と罰」を完成したい念願ではあるが、併し、現段階に於いては、これがわたしの最上の譯である。わたしは「わたしの罪と罰」として、本書に對して強い愛着を持つ。

一、『罪と罰』の名は今日では、映畫になつたり舞臺に上せられたり、又山田憲の鈴辨殺しなどゝいふ社會的事件に結びつけられたりして、可なり普遍的になつてゐる。が、實際の作品は、それ程廣くは讀まれてゐないに相違ない。そこでこの際譯者として特にお願ひして置きたいのは、若し讀者の中に今言つた映畫や芝居その他一般の世評などから歸納して、單純に「罪と罰は非常に面白い小說である」といふ風な概念を抱いてゐられる方があるとすると、この小說の初めの方一二章は、その爲めに却つてひどく退屈に小うるさく感じられるかも知れぬと云ふ事である。が、そこはどうしても、我慢して讀んでいたゞかないと困るのである。一見、何の必要もないかに見える第二章にある醉ひどれの長い繰言と、第三章にある母親の長い手紙とは、その殆んど一語々々が、この小說のその後の複雜な筋の發展に對して、深い關係を持つてゐるのであるから。謂はゞ、この邊の一二章は、讀者にとつて一つの難關である。が、難關は一つしかない。この難關さへ突破してしまへば、あとはもう樂なものである。いや樂どころか、この作品の持つ底知れぬ力に曳きずられて、中途で止まらうとしても止まれなくなつてしまふ位である。この注意は、少々老婆心に過ぎる嫌ひがないでもないが、この難關の爲めに、全卷を投げ出してしまはれないまでも、そこだけ拔いて讀まれるやうな事がないとも限らないと思ふので、一寸こゝに言ひ添へたのである。

一、本譯書中、黑の丸い傍點を施したところは、原書に特に傾斜體活字で現はされてある個所である。

一九二八年五月七日　　譯者

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

解題

小說『罪と罰』が、原作者フョードル・ミハイロヰッチ・ドストエーフスキイの代表作として、世界的に名を知られた傑作であることは、又原作者ドストエーフスキイが、レフ・トルストイ、イワン・ツルゲーネフの二大作家と共に、第十九世紀の露西亞が有する世界的三大文豪の一人であることは、今更改めてするまでもなく、世間周知の事實である。ドストエーフスキイは廿四歳にして既に、處女作『貧しき人々』の發表に依り、一時に文名を確立したが、彼が眞に偉大なる作家としての地歩を獲得したのは、この『罪と罰』一篇の發表に依るとする觀方が最も正しい。

前後八年の西比利亞流刑から赦されて歐露へ歸ると共に、彼は間もなく文學界に復活して、續々大作を發表し始めた。『虐げられし人々』、『死の家の記錄』等、その重なるものであるが、殊に後者は、著者の陰慘たる西比利亞生活を如實に語るものとして、夙に人口に膾炙してゐる。けれども彼が流刑生活八年といふが如き深刻悲痛な體驗を經て初めて獲得された人生に對する新しい觀念、人間の世界に於ける善惡の權衡、及び露西亞人の特長に就いての新研究は、寧ろ『死の家の記錄』の後五年、即ち西比利亞から歸つて七年目の、彼が四十五歳の時に公けにされた、本書即ち『罪と罰』の中に、最も代表的に生かされてゐるといふべきである。

近代の露西亞文學に非常に造詣の深かつた文學評論界の巨人ブランデスに隨ふと、この『罪と罰』を生むべき胎を作者の頭に宿した動機とも見るべきものは、それより幾年か前に、伯林で八十幾歳かの老婆が、贈物で手に入れた幾人かの愛人の中の一人に殺されたといふ一つの社會事件であるといふ事である。そして、このありふれた市井の一事實の作者に與へた問題を解剖して、ブランデスはかう言つてゐる。――「その問題とはこれである。人生は絶對價値を有するものなりや？　何故近代の社會は最も矛盾した樣式でこの問題に答へるのであらうか？　社會に課するよりも

遙かに大きな損害と、遙かに大きな苦痛を自分に課してゐるのだといふ事實を少しも考慮に入れないで、社會はいつも、恥辱乃至は困窮を慮る爲めに生まれた子供を殺す母を、最も苛酷な刑を以て罰する。いや、假令その行爲の動機が、子供に向つて蓄積してゐるあらゆる悲慘から子供を解放しようとする涙ぐましい母心にあつても尙ほ罰する。つまり社會は、不幸で充滿してゐるこの世の盃を、その小さな生物の頭にどうでも注げと强要するのである。しかも社會は、その運轉が勞働者中に疾病を招き、屢々死を致すやうな、工場の設立には反對しないのである。いや、その工場の創立者を工業慾の缺けてゐる地方にあつては、恩惠者と見做しさへもするのである。これはこれまでにも大部分の考へ深い人々が相鬪つて來た問題である。社會が人間生活の價値の上に置く一見相矛盾した二つの評價である。」そして筆を改めて、尙ほ次のやうに言つてゐる。「ドストエーフスキイの作中身を以てこの問題と鬪つてゐるものこそ、この小說の主人公ロヂオン・ラスコーリニコフである。」と。

文豪がこの小說を書き始めたのは、一八六五年で、彼の作家生活は概して窮乏の連續であつたとは言へ、その中でも彼にとつて、經濟的に最も苦しい時代であつた。それは、それまで兄と共に經營してゐた雜誌發行事業が兄の死と共に蹉跌して、事業上の一切の債務が彼一人の頭上へ振りかゝつて來た上に、兄の遺族の生活をも見てやらなければならない破目に陷つてゐたからであつた。そしてそこに如何に切迫した經濟的の事情が潛んでゐたかといふ事は、この大作が、その年の十一月に作者がキスバーデンへの短期旅行から露都へ歸ると直ぐ着手されて、翌一八六六年の一月にはもう『露西亞の報知者』誌上にその一部を現はしてゐる一事に見ても知られるのである。流石に非凡な生活力を持つてゐたこの作者も、この時の執筆には餘程大きな困難を感じてゐたと見えて、一八六六年二月十二日附の手紙で、友人ヴランゲリ男爵に次のやうな歎息を書き送つてゐる。――「わたしは苦役囚人のやうに仕事をしてゐます。――六章から成る長篇なのです。十一月の終りには、大分書き上げてゐたのですが、みんな燒いてしまひました。今ではそれを

白狀する事が出來ます。それはわたし自身に氣に入らなかつたからなのです。新しい形式、新しい計畫がわたしを惹きつけたのです。そこで、わたしはまた新しく書き始めました。わたしは晝も夜も仕事をしてゐるのですが、矢張りまだ少ししか出來てゐません。數へて見ると、わたしは毎月『露西亞の報知者』へ、六枚（印刷した枚數）載せなければならないのです。これは大變な仕事です。併しわたしは、若し心持ちが自由だつたら、それ位書く事は何でもありません。小說は詩のやうな仕事です。それを書き上げる爲めには、精神と想像の安靜が必要です。ところがわたしは債務者共に惱まされ續けてゐます。つまり監獄へ入れるぞなどゝ言つて脅かされてゐるのです。——わたしの心配がどれ程だかお察し下さい。しかも、その中で坐つて書かなければならないのです。これは全く不可能な事です。」

が、かうした困難にも拘らず、この大作は無事完結せられた。そしてそれが讀書界に與へた感銘は、眞に異常なものであつて、ブランデスが、「彼は『罪と罰』に依つて讀書界に生涯中の最大印象を與へた。」と言つてゐるのも、決して單なる誇張ではない。當時の模樣を最もよく傳へてゐるものに、この文豪の最も信憑すべき傳記者の一人ストラーホフの次のやうな言葉がある。

「この小說が一度び讀書界に提供されるや否や、讀者達はもうその事ばかり語り合つた。大抵の人がこの小說の、人を壓迫するやうな力や、重苦しい感銘に就いて語り合つた。これらの壓迫と重苦しさの爲めには、健全な神經を持つてゐる人々でさへ打たれて病氣のやうになるし、弱い神經を持つた人間は、それを讀むのを餘儀なく中止しなければならなかつた。併しこの小說が何にも增して世人の注意を喚起したのは、以上の外に、この小說の事件が偶然にも現實のそれと一致してゐる事であつた。外でもない、『露西亞の報知者』誌上にラスコーリニコフの兇行の場景（シイン）が掲載されたと丁度同じ頃、モスクワに、それと非常によく似た事件が起つたからであつた。それは、或る大學生が、或る金貸業の男を殺して金品を强奪したといふ事件だつたが、しかもその犯罪の動機が、諸種の點を綜合して見ると、殆んど

小説中のラスコーリニコフの犯罪動機と同じく、社會の不正を匡正する爲めにはあらゆる手段が許されるといふ虚無的な信念に基くといふので、一層世人の興味を惹いたのである。作者フョードル・ミハイロヰッチも、その事を非常に重大視して、屢々話題に上せるばかりか、それに依つて自分の藝術的透徹力の功績を誇つてゐた、云々……」

さて本篇の主人公ラスコーリニコフは、一口に言へば善良で同情心の強い男である。が、彼はその性格に多分の病的要素を持ち、作者ドストエーフスキイと同樣、非常に物事に熱狂し易い傾向を持つてゐる。謂はゞ彼は、道德的精神的に可なり動搖を來たしてゐた當時の社會思想（今の日本のそれと酷似してゐる。）の一つの犧牲で、精神的に四肢に比較して頭ばかり大きく發達した一種の畸形兒、生活上地に足のついてゐない、憐れむべき一個の幽靈である。

『罪と罰』はこの同情すべき主人公――一介の貧書生であるラスコーリニコフが、呪はれた思想のとらはれとなつて、或る夏の夕方に、下宿の小部屋をさまよひ出るところに、その物語の端を發してゐる。つまり、どう考へて見ても存在の價値があるとは思はれない一金貸老婆を殺して、その金に依つて自分をも世をも救はう、これは勿論許さるべき行爲だ、いや寧ろ賞讃さるべき性質のものだと思惟する誤謬から、殺人行爲の瀨踏みをする爲めに、質物を持つてその老婆の家へ出掛けるのである。併しその間にも、老婆の住居を出てからも、その考へに對する本能的嫌惡は絶えず心の空虚に顏をのぞけて、この若い男に澁面させる。けれども彼は、自分のその目論見の前に、最早どうする事も出來ない。廻轉してゐる大車輪の一端に捲き込まれたものゝやうに、只ずる〳〵とその中心へ向つて引きずられて行く。この條下を描くに當つては、作者も、それが主人公の意識的であるよりも、寧ろ運命的である事を諸種の材料を連ねて强調してゐる。

遂に主人公は老婆を殺した。（これまでの主人公の心理過程や、兇行の場面の描寫の如何に傑れたものであるかは、敢て玆に縷説するまでもなく、讀者諸君自ら、親しくその實際に就いて翫味される事であらう。）しかも當の老婆ばか

りでなく、その妹である何の罪もないお人好しのリザヱータまでも。以上を發端（第一編）として、第二編以後物語は愈々作の主題に進み入り、論理的誤謬から生じた罪に對する當然の罰は、忽ち主人公の身心を目ざして、猛然として襲ひかゝつて來る。これに對して彼はどうする力をも持たない。かくてあらゆる苦惱を重ねた結果、彼も遂に自分の思想の誤謬に心づき、自分は最も無價値な虱を殺した積りであつたけれども、今となつて見れば、自分も矢張りそれと同じ虱だつたと考へるやうになり、幾千人の人を殺しても少しも意とせぬナポレオンなどゝいふ非常人は「たしかに肉體でなくて青銅で出來てるのに違ひない」と呟くやうになる。青銅は人間ではない。この一句に見ても、わたしは、作者がかゝる非常人を人間として否定し、飽くまで人間同士の殺戮を否定してゐる事に心づかないではゐられない。尤も、主人公が最後の更生に到達するまでには、尙、幾多の心理的波瀾があり、罪をば單に自分の心弱い事に歸して、行爲を是認してゐる傾きがあるが、それも最後に至つては、純眞なる基督教思想の權化のやうな、愛人ソーニャの無力の力の前にすつかり打ち勝たれてしまふのである。

この物語を論ずる者にとつて、今擧げたソーニャの存在は、對ラスコーリニコフの關係に於いてばかりでなく、今それを除外しても、われ等に一つの興味ある思想問題を與へてゐる。外でもない、作者がこのソーニャの口を藉りて、ラスコーリニコフの虛無思想的論理を否定し、それに批判を與へつゝ、未來の完成せる人類生活を暗示する思想の最初の表現を試みてゐるからである。この新しい思想は、『白痴』の主人公ムイシキン公爵や、『カラマーゾフの兄弟』の末弟アリョーシャ等の中に完全な表現を見る運命を持つてゐるもので、一口に言へば最も高い道德的發展をした人間が、最もすぐれてゐるものだといふ思想である。

尙、右の主人公以外、十人に餘る主要人物中最も興味あり且つその描寫の成功せる性格は、作の本筋には殆んど關係がないけれども、主人公の妹ドゥーニャに戀情を寄せてその後を追ひ廻す、非常に複雜な素質の持主である無賴の地

主、スギドゥリガイロフである。彼は智の人で、可なりすぐれた頭腦を持ち、良心の上に一再ならぬ殺人罪を持つてゐながら、嘗て悔悟といふ事のある事をすら知らぬ男である。ところが、彼は彼なりに勇氣も名譽心も持つて居り、私慾からの殺人者として、その行ひ方考へ方に、本書の主人公と一つの對照を形作るものを持つてゐる。しかもこの二人は一つの楯の兩面である。ラスコーリニコフは、この男の中にわざと眼をふさいで見まいとしてゐる自分の一面を見せつけられて、いつもぞつとして顏をそむけるのである。

『罪と罰』は、今日では既に立派な古典である。併し、それにしては、何といふ新しい力を以て、今日尙ほ吾人の胸に迫つて來る事だらう！　しかもそれが一八六六年（わが慶應二年）の作である事を考へると、われ〳〵は一寸不思議な氣さへするではないか。

併し、再考するまでもなく、その理由は明々白々である。つまり、人間が何者かの手引きなくしては到底覗き得ないやうな人間靈魂の深みを、彼の作品は常に手にとるやうに見せてくれるからである。眞理は常に永久に新しい！　天才ドストエーフスキイの神の如き洞察力を以て示される人間心理の眞相が、常に到底そこまでは到り得ない常人にとつて、新しさを失ふ筈のない事は、當然以上の當然と言はなければならぬ。しかも、彼の主人公達は、彼等の高められた靈性に依つて、信じられぬ程に早められた生活をする。普通人が一生涯かゝつて全世界を遍歷しても經驗し得られないやうな事を、一寸そこの公園から向うの辻へ行くゞらゐの間に體驗し味得するのだ。われ〳〵が讀む度に一種の驚異に打たれるのは、あたりまへの事である。既にメレジュコーフスキイも言つてゐる、「レフ・トルストイの作品を讀んだ後では、われ〳〵の肉體的感受性に何等かの變化が行はれる如く、ドストエーフスキイの作品に接した後では、われ〳〵の精神的、智的――若しかういふ表現が許されるなら――感受性の上に、何等かの變化を來たす。」と。蓋し、天才の作品が永遠の生命を有する所以であらう。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

尙、『罪と罰』を、今日の時代相に照合して見ての興味は、それがプロレタリヤ文學の雄なるものである事である。ドストエーフスキイは早く既に處女作『貧しき人々』に於いて、そのプロレタリヤ作家たるの實を明確に示してゐるが、この同時代の他の作家に殆んど見られない特色は、『罪と罰』の中で可なり重要な分け前を占めてゐる貧民生活の描寫に依つて、細民作家としての動かし難い地位を彼に與へてゐるのである。本篇の女主人公ソーニャの父たる醉つ拂ひの老官吏マルメラードフ、その醉餘の繰言、非業の死、その家族、その葬式、それから葬式後に起つた出來事、ヒステリイで肺病病みの妻と大勢の跣足の子供、之等の爲めに與へられたペーヂは、眞にこれを讀む何人をも感動させないでは止まない力を持つた大描寫である。この感動から延いて、讀者はいろ〳〵な問題を考へなければならぬ。先づ最初に頭に浮ぶのは、同じ人間であつて、これ程悲慘な生活を送る人のあるのを默視してゐていゝものだらうかと云ふ疑問である。これは、今日では甚だ幼稚な疑問である。併し、この疑問こそ、今日の複雜な社會問題を起した根源である。そしてこの初歩の疑問を、たゞ通り一ぺんの附燒刃でなく、心底から讀者の心に植ゑつけ得る事に依つて、この作のプロレタリヤ文學としての使命は盡きてゐる。文學の分野に於けるプロレタリヤ運動として、これ以上に何を求める事があらう。眞に深く眼ざめたる疑問は、當來すべき一切の思想乃至運動の母胎である。理論として敎へるのは易い。直接經驗にもまさる感銘を以てその心に沁み入らせる事は、たゞ文學の力を以てする外はないであらう。この意味に於いても、『罪と罰』は眞に典型的のプロレタリヤ文學である。

ラスコーリニコフの思想乃至行爲に依つて代表されてこの作に描かれた時代の傾向が、今日のわが日本のそれと酷似してゐる事を考へるのも、今日改めてこの古典に接する新しい興味でなくてはならない。この作に描かれたそれは五六十年前、つまりわが明治維新前後の露西亞のそれであるけれども、思想的には、今日の日本が丁度それと同じところへ來てゐるのである。作中、豫審判事ポルフィーリイが金貸しの老婆殺しといふこの作の中心事件に對する自家の

解釋としてかう語つてゐる所がある。――「これは書物から來る空想だ。理論に依つて痙攣的に過激な緊張を受けた感情だ。」と。この說明は、とつて以て、現代の日本に於ける或る種の思想行爲などにあてはめる事は出來ないだらうか？　現に、前に述べた山田憲の殺人事件、これなど確かにその半面の眞理を語つてゐるものではないだらうか？

かうした觀察點に立つて見る場合に、一倍の力を以て浮び上つて來るのは、ラスコーリニコフがまだ惡夢のやうな老婆殺しの思ひに惱まされてゐる最中に、ふとして見るあの哀れな痩馬の夢の事である。その馬は、とても牽く事の出來ないやうな重荷をつけた大きな荷馬車につけられて、馬車ひきの無慈悲な鞭の折檻の下に、喘ぎ呻きながら、一生懸命に車を牽き出さうとしてゐるのである。が、どうしても力がそれに及ばない。しかも鞭の雨は容赦なく降る。堪へかねた餘り馬は遂に後脚で蹴る。とそれを見て、まはりにたかつてゐた群集は聲を揃へてどつと笑ふ。中には、唄をうたつてゐるものさへある。荷馬車ひきは怒つて、太い棍棒で馬の背中を打つ。が、それでも馬は進まない。で、馬車ひきは遂に大きな鐵の棒を揮つて、力限り背中をどやしつける。馬は飛び上つて、最後の力で牽かうとする。が、それなり地上に倒れて、息を引き取つてしまふ。

この夢は普通には、人類の世界苦を象徵したものとして說明されてゐるが、ブランデスはそれを一層局限して、當時の露西亞の社會狀態の象徵だと解釋してゐる。そして「事實社會がこの通りだとして見れば、正義を愛する青年等の心に過激な考への湧き起るのも、怪しむに足りないのである。」と言つてゐる。

尤も、かう言つたからとて、わたしは敢て日本の現在の社會狀態がこれと同じだと言ふのではない。併し、露西亞に於いては、このドストエーフスキイの豫言は的中し、ブランデスのこの夢判斷の正鵠を失してゐなかつた事がその後の事實で闡明された。かう言つた事實を考へて見る事も亦今日この作に接する上での興味の一つであると言ふのである。

が、この作の興味が、以上の諸點にのみ止まるものでない事は勿論である。作者ドストエーフスキイが同時代の露西

亞文豪中、ひとり都會の兒であり、知識階級の貧民であつたといふユニックな地位の關係から、われ〳〵はこの作に於いても、當時の露西亞文明の象徴たるペテルブルグを裏の裏まで見且つ知る事が出來るのである。――その街頭の暑熱、ネヴ河の夕陽、濕つぽい秋の夜、むさ苦しい地下室の居酒屋、各種類の借家人の充滿してゐる巨大なアパート、そしてそこにうよ〳〵してゐる下級官吏や、小商人や、淫賣婦や、かうしたものゝ上に費された文豪のすぐれた描寫は外國人であるわれ〳〵にまで、讀過後も長く、身自らその境地にあつたかのやうな深い〳〵印象を殘す。いや、われ〳〵は恐らく、自らその地に生活しても、『罪と罰』の一讀に依つて知り得たゞけのペテルブルグを知る事は、到底困難であらうと思はれる。

この作に就いては、まだ書きたい事が幾らでもあるが、與へられた頁は既に盡きようとしてゐる。暫くこの作を離れて、これまでに言ひ殘したこの作者の藝術家としての一般的特質に慌だしい一瞥を投げて見る事とする。

先づ第一に擧げなければならぬのは、その作品の持つ戯曲的要素の事である。これは『罪と罰』に於いて然るがやうに、彼のあらゆる作品を一貫する特色である。しかもひとり内容が劇的であるばかりでなく、その表現形式も、小說と言はんよりは遙かに多く戯曲的で、彼がその作品を戯曲の形式で發表しなかつたのは、只その時代の文學の主要形式が叙事的物語なる小說にあつたからだとすら言はれてゐる位である。隨つて彼の作品では、會話が非常に重要な役割を勤めてゐる。極言すれば會話のみに依つて成る作品と言つてもいゝ位で、この點、會話の技巧の巧みさに於いて、世界廣しと雖も彼に比肩し得る作家はないとまで言はれてゐるのである。次に、この作者の作品の持つ著しい特色は、その與へる印象の極めて病的である一事である。總じてこの作者は、人間の靈的生活の作家であると云はれ、人間の靈の完全なる寫實主義者、人間の心の病氣の醫者であるとまで言はれてゐるだけに、彼の作品には多く、不思議な人達ばかりが取り扱はれてゐる。ヒステリイ患者や、色魔や、白痴や、不具者や、精神錯亂者や、醉ひどれや、こんな風

の人達ばかりである。たゞ併し、この場合に特に注意しなければならぬのは、彼の作品にあつては、それ等の病者達が皆單にそれだけの病人でなく、他日永遠の健康に更生する爲めに一種の生まれ出づる惱みを惱んでゐるといふ感銘を讀者の胸に與へる事である。蓋しドストエーフスキイの作品が、一個の小說でありながら聖典と呼ばれるに至つたのもその作品の根柢にかうした宗敎的な閃きを藏してゐるからで、この意味では、ドストエーフスキイ自身が既に、人類の深い惱みを一身に負つたさうした宗敎的受難者の一人である。一體この作者は、トルストイなどから見ると、正反對と思はれる程、作中に自分を書かなかつた人であるが、併し、かうした見方からすれば、本篇の主人公ラスコーリニコフを初め、彼の小說の主人公達は皆それ〴〵に彼の一分身であるといふ事が出來る。一個の人間として見る場合、彼自身が既に複雜極まる素質を持つた病的な存在だつたのである。

さて最後に、『罪と罰』なる標題に現はれた作者の意圖の解釋であるが、これはわたし一個の見解に從へば、神の領域を冒さうとした人間の不遜を罪として、その罪に對する罰といふ意味であらうと思ふ。この意味に於いて、後にラスコーリニコフの戀人となる聖なる淫賣婦ソーニャは神の象徵である。基督敎思想の權化である。そしてこの物語は、この一個かよわい、併し宗敎的に强い女の謙遜し卑下し切つた祈りの勝利として、幕を閉ぢる事になつてゐる。この世界にあつて、神を措いて誰が、蚤や虱の存在の意義を知らう！　人生とは絕對價値を有するものなりや？　かういふ疑問は既に人間として許さるべからざる疑問である。併し人は往々にして、この不遜を敢てする。『罪と罰』は思想的には、この疑問に對する作者の鐵槌の如き解答である。つまり、主人公ラスコーリニコフは、身を以てこの疑問の爲めに、血みどろの戰ひを鬪ふのである。この觀方を一つの鍵として臨めば、複雜を極めたこの作も比較的容易に解釋がつくだらうと思ふ。（中村白葉）

ドストエーフスキイ年表

一八二一年　八月三十日、モスクワ、ペテル・ボオル教區なる貧民施療病院内にて、退職軍醫ミハイル・アンドレーエヴッチ・ドストエーフスキイの次男に生れ、フョードルと命名さる。同年十一月四日洗禮を受く。

一八三四年　（十四歳）ドラシュソワの寄宿學校よりモスクワのエル・イー・チェルマークの寄宿學校へ轉校、中學校（ギムナーズヤ）の課程に準じて教育を受く。

一八三六年　（十六歳）文學史擔當教師の影響を受けて、プーシュキンに傾倒。その他、カテムジン・ウェリトマン等の作品を耽讀しはじむ。

一八三七年　（十七歳）二月二十七日、母、マーリヤ・フョードロヴナ・ドストエーフスカヤ逝く。兄フョードルと共にペテルブルグに赴き、陸軍中央工科學校に入學。

一八三八年　（十八歳）バルザック、ユウゴオ、ホフマン、バスカル、シルレル等に熱中し、學校を落第す。

一八三九年　（十九歳）父逝く。

一八四〇年　（二十歳）下士官に任命され、十二月士官候補生となる。

一八四一年　（二十一歳）二篇の劇作、『マリア・ステェアルト』『ボリス・ゴドノ』を作る。（現在には殘らず）八月、工兵少尉に進級。

一八四二年　（二十二歳）八月、中尉補に進級。

一八四三年　（二十三歳）八月、士官學科終了ペテルブルグ工兵隊に編入され、志願して製圖局の所屬となる。

一八四四年　（二十四歳）バルザックの小說『ウーゼニイ・グランデ』、ジョルジ・サン、ショオ等の作品を飜譯。處女作『貧しき人々』に着手し、戲曲を計畫す。文學に一身を捧げんとして、陸軍退職。

一八四五年　（二十五歳）五月『貧しき人々』を脫稿、友人グリゴローヴッチの斡旋により、時の詩人ネクラーソフ及び大批評家ベリンスキイの認むるところとなり、一躍文壇的名聲を得るに至る。年末、『嘲笑ふ人』を計畫し、又『九通の手紙の小說』を書く。

一八四六年　（二十六歳）五月、『貧しき人々』發表。二月『祖國記錄』の第四十四編として小說『二重人格』發表。『刹られたる聲』、『廢止されたる大審院』を書く。小說『プロハルチン氏』を發表。著作集發行、短篇執筆を計畫す。この年の末『同時代』（ソウリエーメンニック）誌編輯所と反目を生ず。

一八四七年　（二十七歳）『九通の手紙の小說』、『主婦』（ハジヤイカ）を發

表。『貧しき人々』分册發行。

一八四八年　(二十八歳)巴里に二月革命起り、ペテルブルグにペトラシェーフスキイ等の政治的結社成る。『他人の妻』、『弱き心』、『過去の人の物語』、『ヨールカと結婚』、『白夜』、『嫉妬ぶかき人』等の短篇發表。

一八四九年　(二十九歳)『ニェートチカ・ニェズワーノワ』を『祖國記錄』に發表。四月二十三日、ペトラシェーフスキイ黨の一員として全黨員と共に捕縛され、ペトロパウロフスク要塞に監禁さる。十二月十九日、勅命により位階褫奪及び懲役を宣告、同月二十二日、死刑の宣告を受け、セミョーノフスキイ練兵場に於いて死刑執行間際に、皇帝の特赦に依り、四年間の西比利亞流刑及び兵役勤務四年間に變更、同月二十四日夜、西比利亞へ護送さる。

一八五〇年　(三十歳)一月オムスクに着、同地監獄にて苦役に服す。

一八五四年　(三十四歳)二月十五日、刑期滿了。三月下旬、西比利亞、セミパラテインスク駐屯西比利亞邊境第七歩兵大隊へ一兵卒として入隊。

一八五五年　(三十五歳)『死の家の記錄』着手。

一八五六年　(三十六歳)一月下士に、十月旗手に昇任。

一八五七年　(三十七歳)三月六日、官吏の寡婦マリヤ・ドミートリエヴナ・イサーエワとクズネック市に於いて結婚。四月十八日、勅命により貴族の階級を恢復し、辭職及びモスクワ居住の許可を請願す。『小英雄』を發表。

一八五九年　(三十九歳)三月、辭職聽許せられ、トゥヴェーリ居住を許可さる。『叔父の夢』を『露西亞の言葉』へ、『ステパンチコエ村及び村民』を『祖國記錄』へ發表。十一月、歐洲居住を許可せられ、ペテルブルグに赴く。

一八六〇年　(四十歳)全集二卷モスクワにて出版さる。

一八六一年　(四十一歳)『虐げられし人々』と『死の家の記錄』發表。

一八六二年　(四十二歳)『穢はしき逸話』を發表。六月、巴里、倫敦、ジェネバ、フローレンス等に旅行。

一八六三年　(四十三歳)『夏の旅行に就いての冬の覺書』を『時代』に發表。夏の間外國に旅行、『賭博者』を構想す。

一八六四年　(四十四歳)一月、雜誌『世紀』發行。『穴倉』を同誌に發表。四月妻を、六月、兄ミハイル・ミハイロヴッチを、十二月共同經營者アポロン・グリゴローヴッチを失ふ。

一八六五年　(四十五歳)『異常な出來事』發表。七月、外國へ旅行。十一月ペテルブルグへ歸り、『罪と罰』に着手。全集發行。

一八六六年　(四十六歳)一月より『罪と罰』發表。秋、『罪と罰』を脫稿し、『賭博者』に着手。女速記者アンナ・グリゴーリエヴナ・スニートキナと相知る。十月、『賭博者』脫稿。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com